

香取遺産

Vol.65

かいじゅうぶどうきょう
「香取神宮蔵の国宝海獣葡萄鏡」

日本最大の海獣葡萄鏡 「兄弟鏡」は正倉院御物



香取神宮の御神宝海獣葡萄鏡が国宝であることは広く知られていますが、この鏡と同じ型で造られた鏡が正倉院に伝世することは意外に知られていないようです。昨秋開催された「正倉院展」に、この「兄弟鏡」鳥獣花背円鏡（海獣葡萄鏡）が出陳されて話題になったことは、まだ記憶に新しいところです。

海獣葡萄鏡は中国南北朝時代末期の6世紀後半ごろに出現し、隋時代を経て、唐時代（618～907年）に盛行した鏡です。葡萄唐草と禽獣を配した西方的図紋が特徴で、中国でも各地から出土しており、わが国にも数多くの類品がもたらされています。正倉院や法隆寺その他各地の古社寺に伝世するもの、また古墳や寺跡など遺跡からの出土品も少なくありません。これら

我が国に伝わる海獣葡萄鏡の中でも、香取神宮蔵の国宝海獣葡萄鏡は大型にしてその制作が優秀なことで知られています。

白銅（銅に錫を加えた合金）製の大型円鏡（径29.7cm）で、鏡面は僅かに反り凸面を呈しています。縁を厚く造る一方、鏡背面は中央付近の地を低く彫り下げて2mmほどの厚さにし、そこに肉厚の鳥獣紋を配しています。

鏡背の紋様構成は、高く突出した界線によって内外二区に分け、内区には牡鹿を銜えて蹲る海獣をかたどった鈕を置き、その周囲に葡萄唐草上に戯れる八頭の親獅子と一三頭の子獅子を配しています。外区には葡萄唐草の中を右回りに疾駆する獅子・鴛鴦・孔雀・鹿・鶏・天馬・鳳凰を表し、界圏には葡萄唐草

にとまり、あるいは飛び交う鳥と昆虫、周縁には飛雲を表しています。

近年の科学的な調査によれば、正倉院鏡とは錫・鉛の含有量が少し異なっており、同じ溶銅を用いていないこと、また二鏡とも錫濃度の高い唐鏡に近い成分であり、制作地は中国である可能性が高いことがわかりました。

一尺近い大型の海獣葡萄鏡は、その精緻で躍動感あふれる文様構成から初唐ごろの制作と推定されています。

中国で制作されたこの「兄弟鏡」が、それぞれ東大寺と東国最大の古社香取神宮に伝えられたことは偶然なのか、大変興味深いところです。

昭和28年3月31日国宝に指定。

問い合わせ
生涯学習課